



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	朝鮮語における〜기 시작하다(〜しはじめる)の出現について
Author(s)	門脇, 誠一
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 118, 119-133
Issue Date	2006-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34108
Type	departmental bulletin paper
File Information	118_P119-133.pdf



朝鮮語における～기 시작하다 (～しはじめる) の出現について

門 脇 誠 一

0. はじめに

本論は、現代朝鮮語で使用される～기 시작하다 (～しはじめる) という形式がどのような経緯を経て出現するようになったかについて考察するものである。

この形式は前項動詞の語幹に名詞形成接辞기를付け、その後に後項動詞시작하다「始める」を後続させたものであり、言ってみれば「～することを始める」という補文構造をとっていると考えられるものである。この構造がどのような過程を経て使用されるようになったかを考察するのが本論の目的である。

そのことを明らかにするためにはいろいろな角度から検討しなければならないが、次のような順序で考察したいと思う。

- ①日本語の「始める」に対応する朝鮮語の動詞が15世紀の中期朝鮮語の段階からどのように変遷してきたかという問題。
- ②動詞に後接する名詞形成接辞기はいつごろから使用されるようになったのかという問題。
- ③日本語の「～し始める」という形式は「～しにくい、～しやすい」などの形式と、前項動詞が「連用形」を取っているという点で共通点を有しているのに対して、朝鮮語のほうはいずれも前項動詞が名詞形成接辞기を取っていわゆる補文構造をなしているという点で共通点を有しているのが、それとどのように関連づけられるかという問題。

1. ではまず、日本語の「始める」という動詞に対応する朝鮮語の形式はどのような変遷を経てきたのであろうか。

現代朝鮮語において、「始める」に相当する動詞として一般的に使用されるものは시작(始作)という漢語に「する」を表す動詞하다を後接させたものである。そのほかにも主に名詞で使用される처음「初め;最初」、また「そのときになって初めて、やっと」という副詞で使用される비로소、それに「始まる」という意味として文章語として使用されないこともないが、普通「～を初めとする、～を初めとして」といった限られた使い方しかない 비로하다がある。^{註1}

1.1 시작하다について

それでは古く遡るとどのような状況になっていたのかを概略述べてみよう。勿論시작하다あるいは비로하다の変遷について記述するためにはその間の時代別の資料を綿密に調査しなければならないが、今回はそのような時間的な余裕がないので不十分ではあるが、主に『月印釈譜』『楞嚴経諺解』などの15世紀のいくつかの文献、『捷解新語』(17世紀)『重刊捷解新語』(18世紀)

註1 비로하다に関して、小学館の『朝鮮語辞典』と『延世国語大辞典』の説明を引用してみよう。
『朝鮮語辞典』

비로한「～を初めとする」국무총리를 비로한 각료전원「國務總理を初めとする閣僚全員」、비로해서「～を初めとして」사장을 비로하여 평사원까지「社長を初めとして平社員まで」
『延世国語大辞典』

1. (ある事実がいつからか) し始める

풍류는 신라에서 비로한 고유의 도이다. 風流是新羅から始まる固有の技芸である
세속화는 본디 진보에 대한 철저한 신앙을 고수한 계몽주의에서 비로하는 것이었다.
世俗化はもともと進歩に対する徹底した信仰を固守した啓蒙主義に由来するものであった

2. (비로한, 비로하여, 비로해서の形で用いられ)、複数のものの中から特定のものを含む
할머리를 비로하여 가족들 모두가 그 구렁이를 죽은 삼촌의 환생으로 받아들였다.

祖母を初めとして家族みんながそのその青大将を死んだ叔父さんの甦りと受取った
광세와 경규를 비로한 지원병들이 하나 둘 기차에 오르기 시작했다.

クワンセとキョングユを初めとする支援兵たちがひとり、ふたりと汽車に乗り始めた
現代語ではほとんど2. の用法でしか使われないものである。

参考までに、副詞의비로소についても触れておくと、(あることが起こってから)そのときになって初めて、やっと 사람들은 집을 떠나 보아야 비로소 가정의 고마움을 알게 된다.

人は家を離れてみて初めて家庭のありがたさがわかる

この点で、順序や時間的に最初を表す처음으로「初めて」とは異なることがわかる。

『交隣須知』(18世紀)『隣語大方』(18世紀)を使用して説明することにした。
なお『李朝語辞典』『古語辞典』をも利用することにする。

A. 中期朝鮮語 (15世紀中葉)

実は、この時期には시작하다という動詞が使用された例はそれほど多くはない。現代語では特殊な使い方ではか現れない前述의미로 시작하다の前身である미로하다が実は中期朝鮮語では広く使用されていたのである。まず시작하다から見てみることにしよう。

- ①『月印釈譜』に次の例が見える。(以下の例は『李朝語辞典』『古語辞典』に載っていないものである。)

夫호말씀 시작호는 거체 쓰호 字ㅣ라 夫は言葉を始める口訣に用いる文字である 月印序 1

聿은 말씀 시작호는 거치오 聿は言葉を始める口訣である 月印序 16

城 싸 사리를 시작호니라 城を築いて生活を始めるのだ 月印 1.44

그제사 아기 나히를 시작호니라 そのときになって子供を生むこと(出産)を始めるのである 月印 1.44

これらの例は明らかに「始める」という意味で使用されているものである。最後にあげた例文は動詞낳다「産む」の語幹に名詞形成接辞 ‘이’ が付いて名詞を形成したものである。^{註2}

- ②『李朝語辞典』『古語辞典』には上の例文はあがっておらず、少し特殊な以下の例だけがあげられている。

등의 브호스르미 시작호야 독이 하 답답거든 發背始作毒盛煩悶(背中の吹き出もののができ毒がひどく苦しむと) 救簡 3.38

註2 この形は 動詞接統形기が出現するまえから生産的に使用されていたものだが、勝木(1986)は、名詞接統形이と動詞接統形이が中央で使われていた時に、名詞接統形として新たに方言から기를借用し、それへの類推で動詞接統形においても기가生じたのではないかと見ている。

법석 시작하야 설워하리러라 開場說法裏（法席の場を開いて説法を説いた）朴通事上 75^{註3}

15 世紀中葉前後の文献を広く調査してからでないと言えませんが、当時の口語をある程度反映していると言われる『釈譜詳節』の索引を見ても시작하다という語は出てこないし、비슷다 についても 1 例しかないこと、また、『李朝語辞典』『古語辞典』にあがっている시작하다の例が비슷다に比べて極端に少ないことから見ても、全体としてそれほど広く使用されていなかったと想像される。

B. 17 世紀・18 世紀

①『捷解新語』『重刊捷解新語』^{註4}

後者は原本とくらべてかなり手を加えられており、両者で対応する部分がないものも少なくない。

a. 『捷解新語』と『重刊捷解新語』に対応する例があるもの

さらはあさてさうてんよりしはしまるせうほとに 그러면 모쪼록 天부터 시작할꺼시니 (3.29)^{註5}

しかれはみようこにちさうてんよりはしめませうほとに 그러면 明後日 早天부터 시작할꺼시니 (4.1)

せんれいにないことをしそめて 前例의 업슨 일을 시작하야 (4.20) 『重刊』(4.26) も同文

註3 『救急簡易方』は1489年に出たものだが、ここでは「発疹」の意味で使用されており現在のように「始まる、始める」の意味ではなかったようだ。

また『朴通事諺解上』は正確な刊行年度はわからないがほぼ16世紀初期と考えられている。
註4 『捷解新語』に関しては、京都大学文学部編の『三本対照捷解新語』のはしがきにある浜田敦氏の説明に従えば、「原刊本は、いうまでもなく、十六世紀末、壬辰の倭乱の結果、日本に抑留されていた康遇聖の手に成り、康熙十五年（1676）司訳院から上梓されたものであり、それから約一世紀後、特に、その間に変化の著しかった日本語の部分を中心に改定を加えて、乾隆四十六年（1781）刊行された重刊改修本、およびその改修本の日本語の本文が原則として平仮名だけで表記されているものを、漢字仮名まじりの、行草体に改め捷解新語の理解に便し、あわせて、日本語書きことば習得の資たらしめようとの意図でつくられた「文釈」。この「三本」は、それを縦横に比較対照することによって、日本語および朝鮮語の、史的研

朝鮮語における〜기 시작하다 (〜しはじめる) の出現について

あすよりわれわれかはしめませうほとに 님일부터 우리 시작할거
시니 (9.3)

『重刊』(9. 3) も同文

b. 『捷解新語』にのみ見られる例

9.19 まことにみもにほんくちをけいこしはしめて

진실로 나도 日本말을 니겨 시작할여

9.21 そなたにほんくちならいしはしめか

자네 日本말 비화 시작호미

b.の二例は現代朝鮮語式に言えば、明らかな間違いとして指摘されるべきものである。なぜなら、前者は動詞니가다「習得する」の連用形に시작하다「はじめる」を後続させる複合動詞の構造をとっているものであり、後者も動詞비호다「習う」の連用形に시작하다「はじめる」を後続させる複合動詞の構造をとっているものだからである。しかし、これを単純に間違いと片付けてしまうことはできない。この本の作成者は日本語の「連用形+はじめる」を明らかに主要な『文型』の一つとして把握していたと考えられるのである。

② 『交隣須知』『隣語大方』^{註6}

a. 『交隣須知』の例

念晦間 님회간에 시작하면 엇셔허온닛가 二十日晦の間に始めたらばどうで
ありませうか (1.15)

究にとって重要な資料となるべきことはいうまでもなく――と説明している。本論では、前者の2冊を利用していることになる。

また、小倉進平の『増訂補注 朝鮮語学史』によれば、「要するに本書は当時に於ける最も完全な日本語学書であつたらしく、康熙十七年戊午以後は訳科の試験も専ら之によって行われ、前に述べた伊呂波・消息などの諸書は全く其の跡を絶つに至つたのである。また、本書の名が古く我が国にも知られて居たことは、「象胥紀聞拾遺」(天保十二年)に「朝鮮国編集スル所の隣語ヲ学ブ書冊」として「倭学書」に「捷解新語十本」と「隣語大方」との二冊を挙げて居るのでも知られる。」と述べている。

註5 この例は『原刊活字本 捷解新語』に載っているものだが、『三本対照』のほうにはこの部分のページが欠けている。

公役 공역을 시작하여 틈이 업습네 公役をはじめてひまがありませぬ
(1.37)

醒 𪎭 후에 다시 시작하야 먹습세 よひのさめてから重てはじめて飲
ませう (2.41)

賑 진흥을 시작하면 굶든 백성들이 사라나오리 진흥 賑恤 (2.46)
すくひを始むれば飢たる百姓がいきでませう

械 器械을 又춘 후에 일을 시작하자 器械をそろへてから事をはじめう
(3.30)

止 긋쳐싸가 다시 시작하면 못허라 止めてかさ子てはじめたらばでき
まいか (4.2)

方 비야흐로 시작하려 험네다 もっぱら始めうといたしました (4.17)

列 버러 한저 ㅈ치를 시작하옵세 并居て饗応をはじめませう (4.38)

b. 『隣語大方』의 例

아무리히두 보와가며 시작할 박세는 혈혈 업스오 どーしても見合せて始め
る外はしかたがござりませぬ (3.2)

위선 시작하야보면 성불성은 하늘에 잇소오리 위선 為先 시작 始作
まず始めて見られましたらば成不成は天にござりませう (4.1)

다시 시작하야보라 ㅎ시기로 이리 ㄴ려왓쎄니와 오래 긋쳐싸가 다시 시작하
는 첫히부팀 구미슈를 계감허려하시면

更に始めてみよとおほせらるるにつきかやうに下りてきましたれども久し
くやめてゐて重子て始めた初年より旧債をお引取なされうとされては (9.7)

시작하다に関してざっと概観してきたが、16世紀の文献については手元
の『訓蒙字会』(1527)を参照すると、どうも「終」の漢字はあるのに「始・初」

註6 本論で使用した『交隣須知』は明治14年に活字本として刊行されたものであるが、本来は江戸時代より写本として伝えられてきたものである。原本が作成された正確な年代はわからないが、雨森芳洲(1668～1755)が関係しているとする18世紀に入ってからということになる。また『隣語大方』は18世紀末ごろのものと考えられているものである。そして、いずれも日本における朝鮮語の通訳者を養成するための学習書であったという点で共通している。

の漢字が不思議なことに見当たらないのである。そこで、『倭語類解』^{註7}を参照してみると「始」 비로슬 ○하시메데又云하시마루「初」 처음○하시메と出ている。

ここにも、시작하다は載っておらず、「始」については비로슬の連体形の形があって、○の後は副詞形「はじめて」と動詞「はじまる」、「初」については名詞形があげられているだけである。この辞書は「朝鮮人の手になる日本語の辞書」として広く利用されてきたものと言われるが、その辞書に日本語の「始まる」という動詞に対応する朝鮮語の動詞として시작하다ではなく비로슬があげられているということは少なくとも비로슬のほうが一般的に使用されていたことを示す証拠になるのではないと思われる。

1.2

次に、비로슬 という動詞の現れ方を中心に見てみよう。下にあげる例はいずれも『李朝語辞典』『補訂古語辞典』に載っているものであるが、『類合』の例以外は実際に原本に当て確認してある。なお、시작하다について触れるところもある。

A. 15世紀

次第로 올라 흘러 났고 또 비로슬니잇고 次第遷流終而復始（次第に移り流れ終わりまた移り流れ始まるのでしょうか）楞嚴 4.5

元은 비르슬 시오 元始也（元とは始まることである）圓覚序 18

났고 다시 비르서시늘 終而復始（終わり再び始まるのを）圓覚下 3-2-5

비르슬 읍슬 廣大하 劫으로 오매 無始廣大劫來（初めのない広大な劫へとやってくるので）牧牛訣 24

이런드로 經文이 한 光明이 東녀그로 비취샤매 비르스샤 故經文始於一光明東照（かくして經文は、一つの光明が東の方向に輝くことから始まり）法華

1.4

처음 비로슬 거시 因이오（最初に始まるのが因である）釈譜 13.41

註7 解題によれば、『倭語類解』は17世紀末18世紀初洪舜明の編著として知られている倭語の辞書として他の類解と同様倭語学習と訳官の科試用として編纂されたものである。

이런디로 世界니르와다 비르소디 故世界起始（かくして世界が起こりはじめるのだが）楞嚴 4.21

B. 16 世紀

효도논 어버이 섬기에 비룻고 夫孝始於事親（親孝行は両親に仕えることに始まり）小諺解 2.31

婚姻의 비로숨을 重케 드신 배니라 重婚姻之始也（婚姻の初まりを大事に考えるところである）小諺解 2.61

以下の例は『李朝語辞典』に載っている『類合』の例である。

비르슬 방 昉 類合下 57 비르슬 시 始 類合下 63^{註8}

C. 17 世紀 18 世紀

『捷解新語』『重刊捷解新語』のいずれにも비룻다 の形は出てこないようである。果してこれらの文献が口語体を反映しているものであるため現れない、つまり、비룻다가すでに文語的な色彩を持つようになっていたのかは今のところ定かではないがとにかく 시작하다 の例しか現れていないのである。

D. 20 世紀

日本の朝鮮植民地時代を前後して編纂された辞書類と学習書を併せるとかなりの数にのぼるが、その中からいくつかとりあげてみよう。

①『日韓通話』（明治 41 年）（増訂 6 版、初版は明治 26 年）を見ると、시작하다 が使用された文があることがわかる。

p81 に학당에서 공부를 띤양 오전에 시작하여서 오후에 파허오

学校にて稽古をいつも午前を始めまして午後に罷めます

②前間恭作『韓語通』（明治 42 年）を見ると、動詞語彙を載せた箇所（p247）に Sijak - ha 시작（始作）- ㅎ 始む とあり、また、p163 に工事を今日始めさせませうか 역스 오늘 시작하랴릿가（始めよと申しませうか）

註 8 『類合』は 1576 年に出たもので、小倉進平『朝鮮語学史』によると、「『千字文』と同様各漢字の下に諺文で朝鮮語の訓・音を附し、児童の学習に便したものである。」と書いてある。

という例文まで載っている。

この『韓語通』はその「緒言」を見ると、明治35年から作業を開始したとある。つまり、『韓語通』に載っている例文はほぼこのころの朝鮮語を反映しているものと想像されるのである。

ちなみに、この文献には미로다の動詞形は載っておらず、미로소「始めて」(p332) という副詞形が載っているだけである。また、名詞形처음「始め」(p56) と接頭辞의 첫 (p56) が載っている。

③金沢庄三郎『日語類解』(明治45年) 下 p31^{註9}

始미로술 はじめる 하씨메루

初처음 はじめ 하씨메

とあって、시작하다 が載っていないのである。これは明治45年に編纂されたものであるから当然시작하다という動詞が使用されていたことは知っていたはずである。なぜ시작하다が載っていないのかに対して確実なことはわからないが、『倭語類解』の説明にそのまま従ったのかもしれない。

このことに関連して、この書の初めに「例言」つまり凡例のようなものが載っているいるので紹介しよう。

「本書は国語を学ばんとする朝鮮人のために、約三千の国語を類別したるものなり。」とし、さらに5つ目の項目に、「故に本書はまた朝鮮語を学ばんとする日本人のために有用なる語彙たるべし、但し二字以上の漢字には朝鮮音のみを施したれば、間々口語と異なるものあるを免れず。」としている。

つまり、まず日本語としても基本的な語彙をあげ、それに対する訳語で

註9 これは、『児童編』『日語類解』『韓語初歩』の3巻が合本となって出ているのでそれを使用するが、その中にある 浜田敦氏の開題によれば、『日語類解』について、『児童編』に遅れること四年、明治四十五年に三省堂書店より出版されたものである。(中略) かの『倭語類解』の改訂版とも云うべきものにほかならず、その両者の間の関係は、あたかも、『捷解新語』の原刊本と改修本、あるいは『隣語大方』『交隣須知』の、それぞれの諸本間に存するものと同様であるとかうべく――と書かれてある。実際『倭語類解』と『日語類解』と比べて見ると、目次にある項目はほとんど同じであり、具体的な語彙に関しても同一のものが多くことがわかる。

ある朝鮮語も基本的な語彙を載せたことがわかる。

そして、「例言」の最後に「その他本書中の訳語につきても更に詮議を加ふべきもの多し、されど編者は国語普及上本書発表の急を感じたれば暫く未定稿のままこれを上梓せり、増補訂正の機会は必ず遠きにあらざるべし。」とある。上の비롯다 についても訳語の中の詮議を加えるべきものの中に含まれていたのかどうか、今のところわからない。

④雑誌『한글』創刊号（1927）

1927年に出版された雑誌『한글』創刊号の1ページ目に비롯다という動詞が現われているのを見つけた。昭和2年当時にも비롯다とう語が文語的ではあるが시작하다と並んで使用されていたことがわかる貴重な例といえよう。

조선말이란 靈物이 조선겨레의 입에서 움죽이기 비롯은지가 아주 줄잡아도 半万年以上이오「朝鮮語という靈物が朝鮮民族の口から発せられ初めてからどんなに短く見積もっても5千年以上である」

以上 朝鮮語의 시작하다 と비롯다に関して概観してきた。これだけでは勿論断定的なことは言えないが、비롯다 という動詞が現代朝鮮語では特殊な用法でしか使用されないのとは異なり、中期朝鮮語から17世紀初め頃まではかなり広く一般的に使用されていたと言えそうである。

なかでも、『楞嚴經諺解』に現れる이런데로 世界니르와다 비르소덕 故世界起始（かくして世界が起こりはじめるのだが）(4.21) また、『捷解新語』に現れる まことにみもにほんくちをけいこしはしめて 진실로 나도 日本말을 니겨 시작호미 (9.19) そなたにほんくちならいしはしめか 자네 日本말 비화 시작호미 (9.21) の例は重要なものである。

まず最初の例は、漢語の「起始」を日本語と同様前項動詞を니르와다「起こる」の連用形（第三語基とも呼ばれる）にして後項動詞비롯다「始める」を続ける複合動詞として齣訳していること。しかも、その後項動詞として시작하다ではなく비롯다が使用されているということ。

次の二例も、日本語同様 前項動詞として動詞の連用形が来ており、しかもここでは後項動詞として시작하다が当てられているということである。

こうして見ると、この日本語と同様の構造を有する形式がありながら、なぜこの構造が現代朝鮮語にそのまま継承されずに「～기 쉽다 (～しやすい)」や「～기 어렵다 (～しがたい)」などの補文構造をとる形式の方へとシフトしてしまったのであろうかという疑問が生じてくるのである。

2. 기の出現について

一方、名詞形成接辞기 はどのような経緯を経て出現してくるのであろうか。

2.1 李基文(1979)によると、p178に「어렵-は-디をもった副動詞を支配した。例아디 어려문 法「さとり難い法」(釈譜 13.40)。これが-기動名詞を支配するようになったのは、文献上 17世紀初のことである。」とし、続いて p179に「中世語の動名詞の中で名詞的用法はほとんど-로だけによってみだされた。それほど-로動名詞の活躍は大きかった。-giはまだ充分に発達していなかったのである。従って近代語や現代語で-기動名詞がする役までも、中世語は-로動名詞がしていたのである。」(日本語訳は藤本『韓国語の歴史』による) 註10

2.2

勝木(1986)は、豊富な用例を駆使して「動詞接続形 ‘gi’ は十五世紀にはごく稀に現れるにすぎなかったが、十六世紀から徐々にその勢力を強め、十八世紀に飛躍的に生産性を獲得し現代語に至っている。」と述べている。

註10 中期朝鮮語における 디 어렵다「～しがたい」の例を『釈譜詳節』『月印釈譜』からあげておく。
乞食하디 어렵고 (乞食しがたく) (釈譜 6.23)
가져가디 어려볼씨 (持っていくのが難しいので) (月印 1.13)
降伏하디 어렵거늘 (降伏させがたいので) (月印 21.116)
この形が後代の～기 어렵다 기 쉽다に連続していると考えられるのである。
ちなみに次の文は-로動名詞に어렵다가後続するものである。
正き 法 ㅅ로초미 어렵더니 (正しい法を教えるのは難しかったので) (釈譜 6.21)

そして、続いて「正確な時期は定かではないが十五世紀をさかのぼることさほど遠くない時期に出現したのであらうと推察される。」^{註11}とも述べている。

この中で、15世紀の文献で動詞接続形‘기’のついた例を8例あげている。そして「十五世紀に見られる動詞接続形‘기’の例は多くない。せいぜい上の例に三・四例が加えられる程度であると思われる。」と述べている。^{註10}この論文で挙げられている例を実際確認してみたところ接続形‘기’の後に시작하다あるいは비롯다の続く例は見られなかった。ただ、『杜詩諺解』25.7として挙げられている例はテキストの中に確認できなかった。

なお、今回は残念ながら『老乞大諺解』『重刊老乞大諺解』『朴通事諺解』などに関しては詳しく調査できなかった。しかし、今回の論文とも関連する内容を含んでいるものなのですぐ調査にとりかかる予定である。

ちなみに、『老乞大諺解(1670)』『重刊老乞大諺解(1795)平安監營重刊本』にある興味深い例をあげておこう。

『老乞大諺解』の例

到家裏喫飯罷	지비 와 밥 머기 못 고	家に帰って飯を食べ終えて	上 3
喫了時	머기 못 차든	食べ終えたら	上 42
喫了時	머구물기 못 차든	食べ終えたら	上 43

『重刊老乞大諺解』の例

我們喫完了	우리 먹기 못 고	我々が食べ終えて	上 38
喫完了	먹어 못 차든	食べ終えたら	上 39
你喫完了	네 먹어 못 차든	お前が食べ終えたら	上 41

『老乞大諺解』の例は、먹다「食べる」の語幹먹-に名詞形成接辞이が接続したものと、먹다の語幹먹-に母音우が付いた形（第Ⅳ語基）に名詞形成接辞口がついた動名詞形である。また他の例で、名詞形成接辞기の形も現れている。

一方『重刊老乞大諺解』の例では、名詞形成接辞기が付いた補文構造の形

註11 勝木（1986）p 44 参照

と『重刊老乞大諺解』と同様連用形（第Ⅲ語基）が先行する形が現れているのである。後者の먹어 뭇거든の形は먹다の連用形に뭇다「終える」の活用形が接続したもので、まさに日本語の「食べ終える」の構造と同様の形式になっているものである。

これらについてはまだ調査が終わっていないので、調査が終わり次第発表する予定である。

以上の記述をまとめてみると以下のようなになるであろう。

朝鮮語の시작하다という動詞自体は勝木（1986）にも指摘されているように、中期朝鮮語の文献にも見えることは見えるがそれほど多くはなかったようだという事。そして、17世紀の『捷解新語』や18世紀の『交隣須知』などには「始める」という意味で시작하다が使用され、15世紀に優勢で、16世紀にも例の見える미뭇다がこの文献には一例も現れないこと。

また、『楞嚴經諺解』と『捷解新語』に日本語の構造と同じ、動詞の連用形+미뭇다, 시작하다の例が現れており、しかも、後項動詞が미뭇다から시작하다に置き換わっていること。

さらに、名詞形成接辞기は16世紀から徐々にその勢力を強め、18世紀になってから飛躍的に生産的になること。などについて述べてきた。

3. 結論

以上のことを朝鮮語だけにしぼって通時的に見ると、ほぼ次のような段階を経て移行したということになろう。

朝鮮語

	I 段階	II 段階	III 段階
形容詞	디 어렵다	기 어렵다, 쉽다, 뭇다	기 어렵다, 쉽다, 뭇다
動詞	連用形+미뭇다	連用形+시작하다	기 시작하다

II 段階から III 段階への移行の時期を今のところ 18 世紀の初めごろを考

えているが、さらに詳細な調査が必要である。ではこの「連用形（第Ⅲ 語基）+ 시작한다（はじめる）」の構造が「기+시작한다」の構造へなぜ移行したのであろうか。

筆者は今のところ、「～しがたい」「～しやすい」などに対応する「기+시작하다」「기+쉽다」などの構造への類推による変化とが考えている。そして、類推作用を起こす要因となったのは、いずれも補文構造を有しているところに求められるのではないかと考えている。勿論、補文構造と言っても形容詞に接続するときは「主格」の関係にあり、「動詞」に接続するときは「対格」の関係にあるという違いはある。しかし、互いに「格関係」を持って結合しているという点で共通していると見られる。

ただ、この仮説が正しいことを証明するためには、以下の問題を解決しなければならない。

①中期朝鮮語における補文構造を有する複合動詞に関する調査。

例えば、現代朝鮮語において、日本語の「～しつづける」に対応する形式に対して、「계속（継続）」（ずっと）という副詞を先行させる形式を使用するが、この形式がいつごろから使用されるようになったのか、また、この形式が使用される以前に、果たして「～しはじめる」と同様に「連用形（第Ⅲ語基）+動詞」のような構造をとることがなかったかどうかを明らかにする必要がある。

②日本語の「～し終える」に対応する朝鮮語の対応についての調査

前述のように、日本語の「～し終える」に対して補文構造をとる形として、「기 못다」と「第Ⅳ語基+로+対格語尾 못다」の二つの形式が共存しているが、それと平行して「動詞の連用形+못다」という複合動詞の形式も現れている。現代朝鮮語ではこれに対応する形式が다（すっかり）という副詞を先行させる形式にとって替わられている。とすると、今度は補文構造から副詞をとる構造へとどのようにシフトしたのかという新たな問題が生じるわけである。

参考文献

- 崔世珍 (1527)『訓蒙字会』 原本影印 韓国古典叢書 (復元版) I [語学類]
1973 年
- 『倭語類解』18 世紀初 原本影印 韓国古典叢書 (復元版) VII [統語学類]
1978 年
- 小倉進平 (1964)『増訂補注 朝鮮語学史』昭和 39 年
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編『異本 隣語大方・交隣須知』1968 年
昭和 43 年
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編『異本 隣語大方・交隣須知補』1969
年 昭和 44 年
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編『児学編日語類解・韓語初歩』1970
年 昭和 45 年
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編『三本対照 捷解新語 本文編』1972 年
昭和 47 年
- 福島邦道・岡上登喜男編 明治 14 年版『交隣須知本文及び総索引 [本文編]』
1990 年
- 赤峯瀬一郎『日韓英三国対話』(1893) 明治 26 年
- 国分国夫 (1898)『増訂三版 日韓通語』明治 32 年 (初版 1893 年 明治 26 年)
- 国分国夫 (1907)『増訂六版 日韓通語』明治 41 年 (初版 1893 年 明治 26 年)
- 前間恭作 (1909)『韓語通』明治 43 年
- 伊藤伊吉『訂正増補 韓語大成全』(1909) 明治 43 年 (初版 1904 年 明治 38 年)
- 朴重華 (1929)『日本人之朝鮮語独学』昭和 4 年 (初版 1923 大正 12 年)
- 梅田博之 (1971)『現代朝鮮語基礎語彙集』
- 藤本幸夫 (1975)『韓国語の歴史』大脩館書店 李基文『国語史概説』の翻訳書
- 李基文 (1979)『国語史概説』改訂版 民衆書館 初版は 1961 年
- 勝木初美 (1986)「朝鮮語における名詞転成語尾 ‘gi’ の出現と発達について」
『言語学研究』第 5 号
- 辻星児 (1997)『朝鮮語史における『捷解新語』』岡山大学文学部研究叢書 16